肺がんについて

- わが国ではがんによる死亡原因の上位に位置するがんです。
- 検診を受けることでがんによる死亡リスクが減少します。
- 検診は毎年定期的に受けてください。ただし、血痰、長引く咳、胸痛、声のかれ、息切れなどの症状がある場合は次の検診を待たずに医療機関を受診してください。
- 検診で「要精密検査」となった場合は、その後必ず精密検査を受けてください。
- 精密検査はCT、もしくは気管支鏡検査などです。
- 検診では、がんでないのに「要精密検査」と判定される場合や、がんがあるのにそのがんが見つけられない場合もあります。
- 検診は自治体と、各医療機関が連携して行っています。精密検査の結果は関係機関で共有されます。※

※精密検査の結果は市区町村へと報告されます。また、最初に受診した医療機関と異なる医療機関で精密検査を受けた場合は、最初に受診した医療機関にも後日精密検査結果が共有されます。（医療機関の検診精度向上のため）

「肺がん」「がん検診」などのがんの情報についてもっと詳しく知りたい方に、国立がん研究センターのがん情報サービスは、わかりやすく確かな情報をお届けしています。

国立がん研究センター
がん情報サービス ganjoho.jp

つくるを支える
届けるを贈る
がんじょうほうギフト

国立がん研究センターは、皆さまからのご寄付で「確かな・わかりやすい・役立つ」がん情報をつくり、全国の図書館などにお届けするキャンペーンを行っています。ぜひご協力ください。

発行：国立がん研究センターがん対策情報センター
がん医療支援部　検診実施管理支援室　2021年４月
協力：厚生労働行政推進調査事業費補助金「検診効果の最大化に資する職域を加えた新たながん検診精度管理手法に関する研究」班

これから受ける検査のこと

肺がん検診

肺がん検診を受ける前に・・・

肺がんはわが国のがんによる死亡原因の上位に位置するがんです。自治体で推奨している肺がん検診（肺のX線検査、痰の検査）は「死亡率を減少させることが科学的に証明された」有効な検診です。早期発見、治療で大切な命を守るために、40歳以上の方は毎年定期的に検診を受診し、「要精密検査」という結果を受け取った場合には必ず精密検査を受けるようにしてください。

すべての検診には「デメリット」があります。がんは発生してから一定の大きさになるまでは発見できませんし、検査では見つけにくいがんもありますので、すべてのがんがん検診で見つかるわけではありません。また、がんでなくても「要精検」と判定されたり、放置しても死に至らないがんが見つかったために、不必要な治療を受けなければならない場合もあります。しかし、肺がん検診はこれらの低い確率で起こるデメリットよりも、がんで亡くなることを防ぐメリットが大きいことが証明されているため、必ず定期的に受診してください。

喫煙と肺

喫煙者は非喫煙者と比べて**男性で約4倍、女性では約3倍肺がんになりやすく**、喫煙を始めた年齢が若く、喫煙量が多いほどそのリスクが高くなります。**受動喫煙（周囲に流れるたばこの煙を吸うこと）も肺がんのリスクを2～3割程度高めます。**禁煙によってご自身と周りの人の健康な肺を守りましょう。

出典：「国立がん研究センターがん情報サービス」
https://ganjoho.jp/public/cancer/lung/index.html#a_factor

肺がん検診の流れ

受付（保険証の提示、質問票の記入）

↓

問診（症状があれば報告）

↓

肺のX線検査、痰の検査
痰の検査は対象者のみ

↓

- **がんの疑いあり 要精密検査**
- **がんの疑いなし 精密検査不要**

↓ 必ず受けてください

精密検査
（CTまたは気管支鏡検査など）

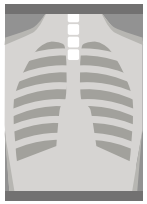
↓

- **がん** → **治療**
- **異常なし** → **次回の検診**

肺のX線検査と痰の検査

肺のX線検査
胸のX線撮影を行います。全体を写すため、大きく息を吸い込んでしばらく止めて撮影します。

- 肺のX線検査の放射線による健康被害はほとんどありません。



肺のX線検査

痰の検査
対象者は50歳以上、喫煙指数が600以上の人です。3日間起床時に痰をとり、専用の容器に入れて提出します。痰に含まれる細胞や成分を測定してがん細胞の有無を調べます。

1日の喫煙本数 × 喫煙年数 ＝喫煙指数

喫煙指数の算出

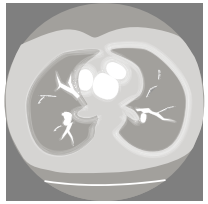
「要精密検査」の結果なら必ず精密検査を受診

肺がんであっても症状が出ないことはよくあります。「症状がないから大丈夫」などと自己判断せず、必ず精密検査を受けてください。また、痰の検査で「要精密検査」となった場合には、痰の検査だけをもう一度受けるのではなく、必ず精密検査を受けてください。

精密検査はCTもしくは気管支鏡検査など

CT
X線を使って病変が疑われた部位の断面図を撮影し詳しく調べます。

気管支鏡検査
気管支鏡を口や鼻から気管支に挿入して病変が疑われた部分を直接観察します。必要に応じて組織を採取し悪性かどうか診断します。



CTスキャン

検診は40歳以上、毎年定期的に受けることが大切です

肺がんの中には急速に進行するがんもあります。早期発見のために必ず毎年、定期的に検診を受けてください。血痰、長引く咳、胸痛、声のかれ、息切れなどの症状がある場合には次の検診を待たずに医療機関を受診してください。